〔岩淵夜話別集六〕一或時駿府にて夏の空俄に曇り、夕立おびたゞしく、雷の聲頻なる折節、家康公御伽衆へ被仰けるは、万事に用心のなきといふ事なし、地震抔は如形急なる物なれども、是以て家作りの仕樣もあり、或は家居の所々、能退場を兼て拵置ば、其難を遁るゝ道理也、略下

〔享保集成絲綸錄二十九〕元祿十六未年十一月

強地震之節者、御番所幷相詰席々明ても不苦之條、向寄之御庭江無遠慮可罷出、此上尤行違にて座席に在之、怪我等仕者、不調法可被思召旨、上意之趣、營中在合布衣以上之面々江、於中之間小笠原佐渡守傳之、老中別座若年寄中侍座、

但此旨、諸向江從御目付中相達、

〔享保集成絲綸錄二十九〕元祿十七申年正月

地震之節之覺

一大廣間出御之時、御白書院之御庭江出仕之面々出し申間敷候、大廣間之御庭江可罷出候、

一御白書院出御之節は、御黑書院之御庭江出仕之面々出し申間敷候、御白書院大廣間之御庭江可罷出候、

一御黑書院出御之時は、御黑書院御白書院大廣間之御庭江向寄次第可罷出候、

右之通兼て可被相心得候、出御以前入御以後は、向寄之御庭江、勝手次第罷出候樣可被致候、

正月

由地震卜占

〔日本紀略九條〕正暦五年十月廿四日壬寅、地大震、有御卜、

〔中右記〕長承四年〇保延元年三月十八日辛卯、此曉地大震、廿二日、外記大夫師長來、知天文者也、問一日地震事、申云、地陰也、后宮大臣之愼也、

〔安倍泰親朝臣記〕謹奏　今月四日戊寅、亥時地震、有音